

病床機能報告制度を用いた自院の実績評価

内田 智久¹⁾ 美原 盤²⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所美原記念病院 医療情報室

2) 公益財団法人脳血管研究所美原記念病院 院長

[目的] 現在策定が進められている地域医療構想において、ほとんどの自治体で推計値と比べ急性期病床数は過剰となっている。急性期病床を有する病院にとってこの問題への対応は病院運営の大きな課題である。そこで病床機能報告制度のデータを用い、当院の急性期病棟機能の評価を試みた。

[方法] 分析対象は当院が所在する二次医療圏にある病棟のうち病床機能区分において高度急性期、もしくは急性期として報告された病棟とし、公表データを元にストラクチャー、プロセス、アウトカムの指標を設定した。ストラクチャーは①1床当たりの看護職員配置、プロセスは②1床当たりの年間入院患者数と③手術件数、アウトカムは④急性期病棟の平均在院日数と在宅復帰率とした。

[結果] ①は、対象病棟間で最低 0.2 人から最高 4.5 人までの差があり、当院が急性期として報告した SCU、7 対 1 病床ともに特に手厚い数値であった。②は、同じく 2.1～81.0 人の差があり、このうち当院の SCU が最多で、7 対 1 病床は 3 番目の多さであった。さらに、両病床とも「予定外・緊急医療入院」の割合は 60% を超え特に高かった。③について、当院が専門とする「神経・頭蓋」の手術件数は当院 17 例、当院以外は 10 例未満もしくはゼロであった。④は、全体の平均が在宅復帰率 86.0%、平均在院日数 20.5 日であり、このうち当院の 7 対 1 病床の在宅復帰率は平均的であったものの平均在院日数は特に短かった。

[結語] 当院の急性期病棟は二次医療圏の高度急性期～急性期病床の中でも良好なポジションにあると判断された。今後は急性期だけでなく高度急性期の増床を視野に入れて実績の強化を図っていきたい。